

## 令和6年長谷山彰理事長年頭挨拶

遅ればせながら新年のお慶びを申し上げます。

令和6年、2024年は元旦から能登半島地震が発生するなど、異例の幕開けとなりました。被災地の皆様には心からお見舞いを申し上げます。

さて、今年、北海道国立大学機構は発足3年目を迎えます。日頃、法人運営、教育研究、産学官金連携の強化にご尽力頂いている教職員の皆様に、厚く御礼を申し上げます。現在の理事会メンバーにとって今年は任期の折り返し地点に差し掛かりますので、これまでの歩みを振り返りながら、今年の抱負を少しお話ししたいと思います。

機構は経営ビジョンとして、経営改革と財政基盤の強化、産学官金連携、DXの推進、広報発信力の強化を掲げています。令和4年度は特に、持続性と裁量性の高い自己資金獲得のため、「ヒトづくり・モノづくり基金」を創設すること、機構全体としての産学官金連携活動を強化するために新しいセンターを設立することの2点を重点目標に掲げて活動を続けてきました。関連規程の制定、資金運用に関わる文部科学大臣の承認、基金運用委員会の立ち上げなど、制度面の整備が終わり、基金ホームページの立ち上げ、基金パンフレットも作成して、すでに基金拡充のための募金活動を試行的に開始しています。

今年の春には募金キャンペーンをスタートさせ、本格的に募金活動を進める予定ですが、キャンペーンには寄付金獲得のみならず、機構・三大学の取り組みを全国に紹介し、学生募集や就職進路支援につなげる意図も含まれています。基金の目標額は10億円であり、これを達成するためには、長い時間と継続的な努力が必要になりますが、三大学の教育研究の基盤を固めるために基金の拡充は是非とも必要ですから、法人事業の柱として力を入れたいと考えています。

教育研究活動について振り返ると教育イノベーションセンター（ICE）では昨年、三大学の新生を対象とした「ルーキーズキャンプ」を4年ぶりに対面で開催しました。専門分野が異なる三大学が共同でつくる学習プログラムを通じて、学生が主体的に学修する姿勢を身につけ、充実した大学生活を送れるよう、また、学生間のネットワークづくりをサポートすることが狙いです。私もキャンプに参加し、学生と意見を交わしたり、北海道の課題解決に必要なアイデアの発表を聞きましたが、若者の柔軟で斬新な発想に感心させられました。

また文部科学省「地域ニーズに応える産学官連携を通じたリカレント教育プラットフォーム構築支援事業」に採択され、三大学連携による機構の取り組みとして初めて競争的資金を獲得した事例となりました。本事業においては、オープンイノベーションセンター（ACE）との連携による北海道の産業活性化に資する実践的な教育コンテンツの開発、自治体、民間企業との連携によって地域活性化を先導する「地域創生アドバイザー」資格の創設などの取り組みを計画しています。

オープンイノベーションセンター（ACE）においては、異分野連携による研究の推進やスタートアップ企業の創出など、いくつかの成果があがりました。機構内の研究者の萌芽的、挑戦的な分野融合的研究を支援するオープンイノベーション促進共同研究において、継続、新規計5件を採択し、ノーステック財団と受託研究契約を締結するなど、商農工連携による研究が着実に進んでいます。また、ACEの共同研究をきっかけとして設立され、メディカルフィットネス事業を展開するエイチスリー株式会社を、機構発スタートアップ企業第一号に認定しました。さらに、オープンイノベーションセミナーの開催や「環境広場ほっかいどう」、「ものづくりサステナフェア」への出展などを通じて、ACEの活動を幅広くアピールする取り組みも実施されたところです。

産学官金連携のさらなる進展、機構の外部資金獲得力の強化を図るため、本年4月には、西井 準治理事をセンター長として産学官金連携統合情報センターが

設立される予定です。このセンターは、外部ステークホルダーとの連携協力の総合窓口となり、ACE の生み出した研究成果を積極的に情報発信することによって、北海道国立大学機構のプレゼンス向上を図るとともに、機構内の研究者の交流と連携を支援する役割を担います。ACE と産学官金連携統合情報センターの協力によって新たな研究シーズを開発し、北海道内外の企業のニーズとマッチさせることで、機構の産学官金連携が進展することを期待しています。

さて、コロナ禍も一応の終息を見、大学の活動も正常に戻りつつあります。対面の交流が増加することは喜ばしい限りですが、北海道の広域に位置し、互いの距離が、東京一岡山間に相当する約 709 キロ離れている三大学においては、オンラインの交流も必要であり、より高度な遠隔授業、遠隔会議システムの開発をはじめ、法人業務の効率化を図る上でも DX の推進が求められます。対面とオンラインによるハイブリッドな交流によって、学問分野や地域の特性が異なる三大学がもつ多様なリソースを活かすことが可能になります。

そして学問の府である大学に多様な人々が集い、活発に議論し、互いが触媒となって新たな価値を創造するためには、自由闊達で平等を重んじる雰囲気醸成が必要です。機構は昨年、「ダイバーシティとインクルージョン推進に関わる理念と基本方針」を制定しました。大学は学問と良識の府であり、自由と平等の理念の下、そこに集う人々の多様な個性と価値観が尊重され、社会の健全な発展に貢献する新たな知を創造する場でなければなりません。

それぞれ異なる伝統と文化を持つ三大学が異文化摩擦を避け、対話と交流によって法人統合の目標を達成するためには、ダイバーシティとインクルージョンに富んだ環境を実現することが必要であり、目標の実現に向け努力を続けます。

令和 6 年は辰年に当たります。俗に鯉の滝登りといいますが、これは黄河の上流にある滝、すなわち登竜門を乗り越えた鯉だけが龍に変身して天に昇ると

いう伝説にちなんでいます。激流に阻まれ傷だらけになりながらも鯉はジャンプを繰り返し飛躍します。北海道国立大学機構も三大学の法人統合という我が国初の困難な事業に挑戦したがゆえに産みの苦しみもありましたが、今は足元を固め次の段階にジャンプする時にさしかかっています。新しい事業に挑戦するときにはできない理由を挙げているだけでは目標に到達することができません。課題を克服する方法を考え抜き、一步一步進むことが重要です。

私は今年も皆様とご一緒に北海道国立大学機構発展のために挑戦を続けてゆく覚悟でありますので、どうぞ一層のご協力をお願い申し上げます。

結びに皆様のご健康とご活躍をお祈りして、年頭の挨拶と致します。